

令和5年度 卒業論文

# 中世のシク活用形容詞について

広島大学文学部人文学科  
日本・中国文学語学コース  
日本文学語学専攻  
B201176 藤井美夕

## 目次

1. はじめに
  - 1.1 ク活用形容詞とシク活用形容詞の違いについて
  - 1.2 ク活用とシク活用の区別の消滅と、「シシ型」について
2. 研究の目的
3. 先行研究
  - 3.1 「シシ型」に関する先行研究
  - 3.2 中世における口語と文語
  - 3.3 「シシ型」の成立に関する考察
4. 調査方法
  - 4.1 調査対象について
  - 4.2 古辞書について
5. 調査結果
6. 考察
  - 6.1 「シシ型」になりやすい形容詞
    - 6.1.1 先行研究から
    - 6.1.2 新たな観点から
  - 6.2 「あし」の特異性
  - 6.3 「シシ型」と「イ型」の同時掲載の忌避
  - 6.4 各古辞書における「シシ型」と「イ型」
    - 6.4.1 『字鏡集』および『下学集』について
    - 6.4.2 『運歩色葉集』および『落葉集』について
7. おわりに

## 1. はじめに

室町時代を中心とする中世は、古代語から近代語への変化が激しく進行した時代である<sup>1</sup>。中世に確認されている語法の変化としては、終止形と連体形の合一化、係結びの崩壊、二段活用の一段化などが挙げられる。さらに形容詞に関して言えば、ク活用とシク活用の区別の消滅が確認されている。

### 1.1 ク活用形容詞とシク活用形容詞の違いについて

ここで、ク活用形容詞とシク活用形容詞の違いについて定義する。まず、ク活用形容詞とシク活用形容詞は、それぞれに属する形容詞の意味内容により違いを見出せる。これは山本(1955)が以下のように主張した考え方である<sup>2</sup>。

ク活用に属する語と、シク活用に属する語との間には、それらが表す概念の上で確かに大きな相違がある。即ちク活(略)は「重し」「白し」「高し」「長し」「深し」等の状態的な属性概念を表わす語が大部分であるに反しシク活は「うれし」「恨めし」「悲し」「楽し」「恋ほし」等の心的な、情意的な面を表わす語が大部分である。相互の例外は無いではないが、極めて僅少である。奈良時代に於ける例外の率は約二十パーセントである。この例外は時代がたつとともに増加するが、それは形容詞の意味が次第に転用されて、本来あった活用形と意味との密接な関係が次第に薄くなって行った結果であろうと思われる。(p.71)

すなわち、ク活用形容詞には状態的な属性概念を表す語が多く、シク活用形容詞には情意的な内容を示す語が多いということである。ただし小田(2015)が指摘しているように、その例外は様々に存在している<sup>3</sup>。

また、両者の違いはその活用に見られる。現代の学校文法で扱われている通り、古語の形容詞には2種類の活用が存在し、連用形が「-く」という形になるものをク活用、連用形が

---

<sup>1</sup> 柳田(1985)は室町時代について、「日本語の歴史におけるこの時代は、中世の後半に当たり、古代日本語が近代日本語に転じていく過渡期に当たると言われている。従って、この時代の日本語を見つめることは、日本語がどのような歴史をもつのかについて考えることになるはずなのである」(p.3)と述べている。

<sup>2</sup> 引用部分の傍線は筆者による。以下本稿においては、特記のない限り、引用部分の傍線、補足、省略は全て筆者によるものである。

<sup>3</sup> 小田(2015)は、ク活用だが情意的な語の例として「痛し・憂し・痒し・辛し・憎し・妬し・愛し」を、シク活用だが状態的な語として「現し・嶮し・正し」を挙げている。また、「良し(ク活用)」と「悪し(シク活用)」、「よろし(シク活用)」と「わろし(ク活用)」などを例に挙げ、活用の区別は「必ずしも状態性・情意性の別によるものとはいえない」(p.265)としている。

「-しく」という形になるものをシク活用と呼ぶ。しかし北原（2010）が「ク活用の語幹と対応するのは、シク活用では『-し』までである。つまり、シク活用の語幹は『-し』とするのがむしろ妥当である」（p.18）と述べているように、シク活用の語幹に「し」を含めて考えることで、ク活用とシク活用の違いは非常に明快なものになる。例えばク活用「白し」とシク活用「正し」の活用表を比較してみると以下の通りである。

〈表1〉学校文法

	語例	語幹	未然	連用	終止	連体	已然	命令
ク活用	白し	しろ	-く -から	-く -かり	-し (-かり)	-き -かる	-けれ (-かれ)	-かれ
シク活用	正し	ただ	-しく -しから	-しく -しかり	-し (-しかり)	-しき -しかる	-しけれ (-しかれ)	-しかれ

〈表2〉シク活用の語幹に「し」を含めた場合

	語例	語幹	未然	連用	終止	連体	已然	命令
ク活用	白し	しろ	-く -から	-く -かり	-し (-かり)	-き -かる	-けれ (-かれ)	-かれ
シク活用	正し	ただし	-く -から	-く -かり	- $\phi$ (-かり)	-き -かる	-けれ (-かれ)	-かれ

〈表2〉から分かる通り、シク活用の「し」を語幹に含めると、両者の活用の違いは、終止形が「-し」か「- $\phi$ 」かという点のみになる。小田（2015）も、シク活用の語幹に「し」を含めることには相当に根拠があると主張している。

語幹が現れる環境に、シク活用の語は「し（じ）」の部分までが現れるし、[を+語幹+み]の句型でも「風をいたみ」（百48）に対して「野をなつかしみ」（万1424）のようになる。また、語構成でも「にく-む/くるし-む」、「らうた-がる/ゆかし-がる」、「きよ-げなり/うつくし-げなり」のように、語幹が現れる部分に、シク活用は「し（じ）」までが現れる。これはシク活用の後の語幹が「し（じ）」までである証拠である。（p.266）

## 1.2 ク活用とシク活用の区別の消滅と、「シシ型」について

以上のことを踏まえ、ク活用とシク活用の区別の消滅について紹介する。〈表 2〉で示したように、両者の活用の違いは終止形の形のみである。すなわち、ク活用とシク活用の区別の消滅とは、終止形が統一されることを意味する。過去の研究より、形容詞の終止形統一とは、次の二つの変化に起因するものと推測される。

〈イ音便化〉

連体形が「-き」から「-い」へと変化すること

〈連体形と終止形の合一化〉

終止形が連体形と同じ形へと変化すること

なお、〈終止形と連体形の合一化〉とは、中世に顕著に見られる、連体形の語形が終止形にも用いられるようになるという変化のことである。北原 (2010) はこの合一化について、以下のように述べている。

時代が降ると、この活用形 (形態) とその用法 (職能) との対応にずれが生じてくる。本来体言に連続する形である連体形が、(略) 終止するところにも使われるようになる。連体形で終止する用法、つまり、連体形終止法の成立である。

これは形容詞だけに起こったことではない。活用する語にあまねく生じた変化である。(略)

連体形終止法の始まった時期、完了した時期は、いずれも明確には言えない。言葉の変化というものはそういうものである。徐々に始まって、いつの間にか終わっているのが普通である。ここでは、連体形終止法が成立し、それによって現代語の形容詞の活用が誕生したということが重要なことなので、連体形終止法が完了したとまでは言えなくても、かなり進行したのは鎌倉時代以降、室町時代を通してであるということだけを確認しておく。(pp.20-21)

また山田 (1958) は、〈終止形と連体形の合一化〉を「古代語が近代語に脱皮する第一歩」(p.138) と位置付け、以下のように述べている。

もともと連体形は、そのまま文を断止させる感じを与えず (上に係りのことばがあれば別であるが)、下に続いて行く感じを持たせるものであるから、この連体形止めの用法は未完結な感じを与えるのであり、そこに余情とか余韻とかの感情が発生して来たのであろう。古代日本人のこのみになかった表現法だったわけである。(略)

口語におけるこの言いまわしの盛行は、この連体形止めの用法を特別の表現とも考えられないようになったものと見え、院政期の文献に余情とか詠嘆とかの意味をとみなわ

ず、普通の終止形と同様に用いたものが地の文にも用いられるようになった。(p.140)

すなわち、〈終止形と連体形の合一化〉は、余情や余韻を表現する用法として発生し、その後口語における終始形として一般に用いられるようになったということである。鈴木(1963)も、同様の考えを示した上で、平安時代から室町時代にかけての文法史における形容詞の変化について次のように考察している。まず、連体形での〈イ音便化〉は平安時代には発生していたと述べている。そして院政鎌倉時代には、会話文や引用句などの特定の場面において〈連体形と終止形の合一化〉が起きていたものの、〈イ音便化〉する前の「ーき」の形で用いられる場合が多かったと指摘している。その後室町時代に入り、〈イ音便化〉した後の「ーい」の形で文を終止させる用法が一般的な場面においても使用されるようになったと主張している<sup>4</sup>。この説を踏まえれば、形容詞の終止形においては〈連体形と終止形の合一化〉が〈イ音便化〉に先行して起きていたと言える。

しかし北原(2010)が述べているように、言葉の変化について明確に区切りをつけることは困難である。またここでは、ク活用とシク活用の区別が消滅したという事実に目を向けるため、その過程の詳細や順序について深く検討することはしない。

以上二つの変化に伴う、活用の区別の消滅により、中世のク活用形容詞とシク活用形容詞の終止形に「しーい」という形が誕生する。しかし中世のシク活用形容詞の終止形にはもう一つ、「しーし」という形が確認できることは、多くの研究者により指摘されているところである<sup>5</sup>。すなわち、中世のシク活用形容詞には、従来の終止形「しーφ」、ク活用との終止形統一による終止形「しーい」と合わせ、3種類の終止形が存在していたのである。例えば「正し」の終止形では、

- ① 「ただしーφ」 「ただし」 (従来の終止形の形)
- ② 「ただしーい」 「ただしい」 (終止形統一により誕生した形)
- ③ 「ただしーし」 「ただしし」

といった具合である。なお本稿では便宜的に、①～③をそれぞれ「シ型」「イ型」「シシ型」と呼ぶことにする。また、先行研究との統一性やわかりやすさを優先し、「しーφ」「しーい」「しーし」はそれぞれ、「し」「しーい」「しし」と表記する。

以上説明してきたような終止形統一の過程においては、「シシ型」が登場する余地はないように思われる。また、「シシ型」の進行の様子や、「シシ型」と「イ型」の関連など、「シシ型」には解明されていない点が多く存在する。

---

<sup>4</sup> 鈴木(1963)は、口頭での形容詞の終止形が「ーき」から「ーい」へと変わったことについて、「これが変化の方向であると思われる」(p.57)と考察している。

<sup>5</sup> 例えば柳田(1985)は、「俗文語文に、シク活用形容詞の終止形を「アシシ」(悪)「オソロシシ」(恐)のように「～シシ」形としたものが散見する」(p.113)と述べている。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、「シシ型」が現れる形容詞と現れない形容詞の違いや、「シシ型」と「イ型」の関係について、新たな発見を試みることである。よって本研究は、中世の古辞書を対象に頻度調査を行い、「シシ型」と「イ型」の現れ方の傾向を確認した上で、その調査結果をもとに考察を進めるものとする。

## 3. 先行研究

### 3.1 「シシ型」に関する先行研究

○鈴木丹士郎「形容詞『ーシシ』について」『国語学研究』三 1963年

鈴木(1963)は、基本的な性格を持つ形容詞に「シシ型」が現れやすいことに着目し、「基本的な性格をもつ語は、目新しいものとも映らず耳ざわりでもなく、いわば無色のものとしてごく普通に用いられていたと考えられる。したがって、『し』を更につけ加えた形『しし』で古めかしさを表現しようとしたのではないか」(p.56)とし、「シシ型」を「人工的な文語」(p.56)と評している。また、以下のようにも述べ、強調表現としても用いられていたと考察している。

形容詞は、口語においては連体形のもとの形「き」か、更には音便形「い」を用い、シシ語尾の方は文語として用いられたものであろう。(略)また、(略)「曾我物語」に「たのもししたのもしし」(巻二)、謡曲の「春栄」・「大江山」に「うれししうれしし」とあるように重ねてくり返し用いられている場合が見られ、これは強い感情的な表現と考えられる。シシ語尾形容詞はこのように一種の強調的表現をも担っているといえる。(p.57)

また、「口語の資料に例が非常に少ないこと、認められても地の文であったり、会話文のものでも改まった硬い場面に用いられていることなどからシシ語尾形容詞が非口語的なものであるということができよう」(p.57)と指摘しているが、これに対してはのちに辛島(2003)が、「鈴木氏が(略)〈非口語的〉といわれるのは、決して口頭語で用いられないというのではなく、いかにも文章で使いそうな堅苦しい、あらたまった表現という意味で捉えるべきではないかと思う。」(p.135)と述べている。

○山内洋一郎『中世語論考』1989年、清文堂

山内(1989)も鈴木(1963)と同様に、「シシ型」が強調表現であった可能性を指摘している。そして、「シク活用の終止形は語幹でもあって、体言性が強い。感動表現にはそれでよいが、強調的に述定しようとする、その態度をはっきりと示す語尾——ク活の『し』に相当する部分——が欲しくなるのであろう」(p.33)と述べ、「シシ型」の起源を、強調表現の際の物足りなさに見出している。

さらに「強調的述定という場と表現形式は、古色で固い表現となりやすいもので、出現当初からそのような表現価値を持った口語現象で、室町時代に移るにつれて、文語化したものと考えたい」(p.33)と述べている。換言すれば、強調的述定と古色で固い表現が結びつきやすいものであるために、口頭表現から次第に文語化したのだと推察しているのである。

○北原保雄「形容詞の語音構造」『中田祝夫博士功績記念 国語学論集』1979年、勉誠社

北原(1979)は、「シシ型」の成立の過程を、口語からの文語の再構という観点から考察している。

シク活用、たとえば「はげし」の口語の終止形は、文語の連体形「はげしき」がイ音便化した「はげしい」である。(略)口語形「はげしい」からいかにして文語形を再構するかが問題なのであるが、この場合に、「はげしい」の「い」を取って「はげし」を復原するのは(略)、当時の人にとっては難しいことであつたろう。何故ならば、「はげしい」は「はげしく」「はげしき」などの活用形をもち、「い」は重要な活用語尾(あるいはその一部)と意識されていたと想像されるからである。そうであれば、もう一方の再構、つまり「はげしい」の「い」を「し」に変えて文語形「はげしし」を得るという方向(略)をとることになる。これをク活用への類推ということもできようが、個別の形容詞の文語形を再構する場合に、ク活用だシク活用だと区別しているわけではないから、要するに「——い」は口語形、「——し」は文語形という意識に基づいた再構であるということになる。(p.222)

以上のように述べ、「シシ型」は「イ型」から再構されたものであると考察している。しかし一方で、「恐らく室町時代中期のころには、『——い』という口語の終止形がほぼ普通になっていたであろうが、『——しし』はそれよりかなり早い時期から認められるのである」(p.224)とし、「シシ型」が「イ型」の定着以前に現れることを、論の問題点として挙げている。この解決方法として、人々の意識面に着目することの有効性について触れてはいるものの、具体的な考察は行われていない。

○辛島美絵「シシ語尾形容詞について」『仮名文書の国語学的研究』2003年、清文堂  
(傍点は、引用本文に施されているものである。)

辛島(2003)は、「イ型」から「シシ型」が再構されたとする北原(1979)の説を支持している。その上で、北原(1979)の問題点については次のように考察している。

これを矛盾なく説明するためには、その発生を担った特定の階層の人々を想定する必要があるのではないか。文献上ではシク活用終止形が「ーし」だった時代に容易にそれが思い浮かばなかった人々、すなわち、日常的に文章・文語に接することが少なく、文語の規範に束縛されにくい階層の人々である。鎌倉時代以前におけるシシ語尾形容詞は、日頃文筆に親しくない人々があやまって発生させた形と見ることによりはじめて無理なく説明できるのではないだろうか。(p.131)

そして東大寺文書の起請文に「アナカシコイ」という形が見られることを例に挙げ、「鎌倉時代であっても、文筆に親しくない階層の人々の口頭語ではすでに終止形『ーい』が一般化していた可能性はきわめて高いのである」(p.132)と指摘している。

さらに、古例が「口語性の強い説法談義」(p.133)や「非知識層の人の手になる願文」(p.133)に現れていること、および「シシ型」が「本来、会話に代表されるような一人称の文中で使用される率が非常に高い」(p.135)ことを指摘し、以下のように結論づけている。

以上の事柄を勘案するに、シシ語尾形容詞はおそらく文筆に親しくない人々がかしこまって表現しようとしたときに誤って「ーしし」形を用いたのが始まりだったのではなかろうか。それが勢力を持ち、〈文語的な表現〉としてむしろ口で表現する時に使用されていたのではないかと思う。(略)少なくとも鎌倉時代以前においては〈口頭語で主に使われた文語的表現〉というところに「ーしし」形の特色があったのではないかと推察される。(p.135)

○村田菜穂子『形容詞・形容動詞の語彙論的研究』2005年、和泉書院

村田(2005)は「されども、やはり鎌倉時代以前では、シク活用形容詞の終止形は『ーしき』であって、『ーしい』は連体形に現れる形でしかなかったはずである」(p.197)と述べ、北原(1979)の説に否定的である。その上で、「シシ型」は「イ型」ではなく、連体形と終止形の合一化により誕生した「ーしき」という終止形から復元されたものだと主張している。

以上見てきたように、多くの先行研究において、「シシ型」の起源は口頭での文語的表現として誤って使用されたことにあると解されている。換言すれば、「シシ型」は、堅苦しく改まった表現をしようとした人々が誤って作り出した、いわば過剰矯正により誕生した可能性が高いのである。この説は、樞之本北元「古學截斷字論」天保五年板における以下の記述からも、説得力のあるものといえるだろう。

又嬉し。久しと言べきを。嬉し。久しと遣ふは一向の誤也。(p.249)  
嬉しとはいはれぬ詞なり。よく人の誤る所。此抄の文の中に。片輪の噂など好みていふ事あし。浮哉とてあし。此格を見てや名高き人の句にも。嬉し。久しと遣いたるも有。是は詞のはたらきといふ事をしらぬひが事なり (p.256)

### 3.2 中世における口語と文語

「シシ型」を検討するにあたり、口語と文語について理解しておくことは非常に重要であるだろう。よってここで、口語と文語の関係、および中世における文語への意識について簡単にまとめる。

日本語学における一般的な理解として、文語に比較し、口語は流動性の強い、自由な言葉であるとされる。このことについて亀井(1976a)は、「つねに口語は流動していた。文章のほうはそうではない。そこには、口語にみる流動はない。一定の選択された言い回しが、ここでは慣用として固定し、その束縛は文法の面において、もっともいちじるしい」(p.209)と述べ、口語を「生きている」(p.210)もの、一方の文語を「将棋のようなもの」(p.210)と表現している。また、根来(1976)は中世の文語について、徒然草を対象とした研究を通して、次のように考察している。

(略) 徒然草は雅語的要素を持つ文語いいかえれば雅語的な平安中期のままをおそった言語をもって書かれている。が、やはりすべてはおそうことができなかつたと見えて、少なからず破格のてにをはを見ることができる。(略)ところで、さらに徒然草をさぐっていくと、上に述べた雅語的要素を持つ文語でも口語的要素を持つ文語でもない、いうならば中世の文語、正確には中世を特徴づける文語のなかの文語というべきものが見えるのである。(pp.44-45)

その上で、「中世以後の文語は口語の影響を受けて徐々に変遷し、中世から近世へと時代がさがるにつれて中古語とも異なり当時の口語ともちがう中近世独自の文語が現れてくるようになる」(p.77)のだと主張している。

また山田(1958)は、〈連体形と終止形の合一化〉は口語において発生し始めた変化であ

るとしている。その上で、「並行している筈の文語と口語との関係であるが、その間柄は孤立した関係でなく、ある場合は口語が文語に影響を与え、文語が口語に影響を与えることがあるのである。中世における文語の連体形終止法は、明らかに口語の動きが自然に反映している」(p.144)と述べている。すなわち、口語において始まった変化が定着し、文語においても広まったものと考えられる。

これらの研究より、中世の文語は、平安時代の言葉をそのまま再現したものではなく、中世当時の口語の変化に影響を受けた独自のものであると言える。よって「シシ型」は、新しい口語形である「イ型」に影響を受け、それに対する文語形として生まれたものと考えられることができる。ここからも、「シシ型」は誤って作り出された文語的表現であるとする先行研究の説には、強い説得力があると言える。また、換言すれば、当時の人々の間では「シシ型」は文語、「イ型」は口語という規範意識が働いていたと推察できる。

### 3.3 「シシ型」の成立に関する考察

以上述べてきたことを踏まえ、「シシ型」の成立過程について考察する。〈連体形と終止形の合一化〉により、ク活用形容詞とシク活用形容詞の終止形は同じ形となり、両者はすべての活用形において同じ形を有するようになった。よって当時の人々がク活用とシク活用の違いを見出すことは非常に困難なことだったと想定できる。また、〈イ音便化〉により誕生した終止形「イ型」は、口語形として流通したのと考えられる。そしてこの口語形に対する文語形として、「シシ型」が誕生したのである。

ではなぜ、文語として「シ型」が復元されずに、「シシ型」が生まれたのか。北原(1979)は「これをク活用への類推ということもできようが、個別の形容詞の文語形を再構する場合に、ク活用だシク活用だと区別しているわけではないから、要するに『—い』は口語形、『—し』は文語形という意識に基づいた再構であるということになる。」(p.222)と主張している。この主張について、もう少し丁寧に検討する。確かに、当時は活用の区別が消滅しており、人々が活用の区別を認識できていたとは考えにくい。ゆえに、本来はク活用とシク活用で形の異なる終止形についても、ク活用と同じ復元方法をとらざるを得なかったのだと考えられる。このような復元を行った場合、〈表3〉のように、シク活用形容詞の終止形は「-φ」(例：正し)ではなく「-し」(例：正しし)となる。

〈表3〉シク活用においてもク活用と同じ復元が行われた場合の活用表

	語例	語幹	未然	連用	終止	連体	已然	命令
ク活用	白し	しろ	-く -から	-く -かり	-し (-かり)	-き -かる	-けれ (-かれ)	-かれ
シク活用	正し	ただし	-く -から	-く -かり	-し (-かり)	-き -かる	-けれ (-かれ)	-かれ

また、「ーし」が文語形という意識は、古代語からの終止形である「シ型」に由来するものと考えられる。中世の人々は、新たに文語形を創出したかったわけではなく、平安時代に使われていた言葉を再現したかったのだろう。しかし中世に進行した〈連体形と終止形の合一化〉の結果、活用の区別が消滅してしまい、シク活用形容詞の従来終止形「シ型」をうまく捉えることができなくなってしまった。そのため、ク活用の終止形に倣った類推が行われ、実際には誤った形である「シシ型」が作り出されたのだと推察できる。まさに「シシ型」は、中世独自の文語的表現であると言える。

## 4. 調査方法

### 4.1 調査対象について

本研究では、先行研究で「シシ型」が発見されているものを中心に計 80 種の形容詞を抽出し調査した。

また本研究では、中世の形容詞を網羅的に観察するため、古辞書を調査対象として選択する。例えば物語などを調査対象とした場合、その物語の内容により、形容詞の登場頻度に偏りが生じるものと予想される。そのような事態を避け、より多くの形容詞に調査が及ぶようにするという目的のもとでは、古辞書が最適な調査対象だと考える。また、古辞書やその諸本の数の多さにより、統計調査の信憑性が高まると考えられることも、古辞書を選択する理由の一つである。

調査対象とする古辞書は以下の通りである。

- ・『字鏡集』 諸本「寛元本」
- ・『下学集』 諸本「東京教育大学蔵古本下学集」「春林本」「文明十七年本」  
「前田家蔵古本下学集」「文明十一年本」「榊原本」「亀田本」
- ・『節用集』<sup>6</sup> 諸本「伊京集」「明応五年本」「饅頭屋本」「黒本本」「易林本」  
「文明本」「弘治二年本」「永禄二年本」「堯空本」「両足院本」
- ・『倭玉篇』 諸本「夢梅本」「篇目次第」「慶長十五年本」
- ・『運歩色葉集』 諸本「静嘉堂本」「元亀二年京大本」
- ・『落葉集』 「本篇」「色葉字集」「小玉篇」

---

<sup>6</sup> 『節用集』は中世末から近代前期にかけて、増補改変が繰り返された一群の国語辞書を指す。ゆえにその点数は膨大であり、「編纂された時代と性格から『古本節用集』と『近世節用集』に分けて考えるのがふつうである」(沖森(2023) p.74)とされている。本研究で取り扱う『節用集』はすべて「古本節用集」に分類されるものであり、本稿で紹介する『節用集』も「古本節用集」について述べるものとする。

## 4.2 古辞書について

それぞれの古辞書について、以下に紹介する。(沖森卓也編『図説 日本の辞書』、『図説 日本の辞書 100 冊』、西崎亨編『日本古辞書を学ぶ人のために』より作成)

### 『字鏡集』

分類：部首の意義分類体

種類：漢和辞書

成立：1245（寛元三）年以前

選者：菅原為長か

内容：七巻本と二十巻本がある。部首が、「天象、地儀、植物、動物、人倫、人事…」など、意義ごとに分類されている点が大きな特徴で、掲出字の配列は字形の類似によっている。字音は片仮名で記され、他に韻目、反切、義注、異体字、和訓などが注記されている。「字鏡抄」を母胎とし、「倭玉篇」へと続く様相を呈している字書である。

諸本： 「字鏡抄」の写本としては、「永正本字鏡鈔（抄）」（1508年写本）や「天文本字鏡鈔（抄）」（1547年写本）が知られている。これらのそれぞれから七巻本と二十巻本が成立したと考えられている。七巻本の諸本には、増補的な「寛元本」があり、二十巻本の諸本には「応永本」「白河本」などがある。

### 『下学集』

分類：意義分類体

種類：国語辞書

成立：1444（文安元）年

編者：東麓破衲<sup>7</sup>

内容： 意義によって「天地・時節・神祇…」など18門が立てられ、見出しの語を漢字で掲出し、原則として漢文で注が施されている。各部門の内部も、意味の類似する語が連想的に配列されている。漢文の注には、その語の意味・語源、語の使い方、誤用・俗用の説明、また異名・別名などが記されている。実用的な辞書であるとともに通俗的な教科書のような性格も有していたと考えられ、後の『節用集』の成立に大きな影響を与えた。

諸本： 写本としては、年代の確定するものでは「文明十一年本」（1479年写本）が最古で、「文明十七年本」（1485年写本）がこれに次ぐ。刊本としては、1617年本が最初であり、他に「増補下学集」（1669年刊）、「和漢新撰下学集」（1688年刊）などが知られている。

---

<sup>7</sup> 建仁寺もしくは東福寺の僧かと言われている。沖森（2023）p.44より。

### 『節用集』

分類：第一音節によって語をイロハ分類し、さらに意義分類して配列

種類：国語辞典

成立：1444（文安元）年～1474（文明六）年の間

編者：未詳

内容： 諸本によって意義分類のしかたや名称、見出し語数に相違がある。見出し字には右傍に片仮名でその語形を記し、下には細字で語義・異体字・別名などを注記することもある。また左傍には別の音訓が付記されることもある。当初より、漢語・漢文を収録している点で、教養書としての性格が強い。

諸本： 現在約 50 種が知られているが、その多くは写本であり、刊本は数点である。諸本の系統は、巻頭の「い」部天地門の最初に記されている語によって、伊勢本、印度本、乾本の三つに分類される。諸本の中で特に増補の著しいものが「文明本」であり、その所収語数は最多である。

「文明本」は他の諸本と異なり、漢字字書的な体裁を取っていたものと考えられる。西崎（1995）は「文明本」について、「漢字の漢音・呉音を明示し、音の清濁も清音読みの語である『炎上』の『シヤウ』の『シ』の仮名に『〇』の不濁点、濁音読みの語には濁音符『゛』を施すなどして精彩を放っている。この他として、(略) 当時よく読まれた多くの漢籍古訓点などの主要引用部分・成句をまとめた門があり、これに詳細な訓読表記が施されていて国語史の面から貴重な資料ともなっている。」(p.219) と述べている。

### 『倭玉篇』

分類：部首分類体

種類：漢和字書

成立：15 世紀初前後

編者：未詳

内容： 『和玉篇』とも書き、『新撰字鏡』、『類聚名義抄』、『字鏡集』の系統を引き成立した。増補改編されて体裁は様々だが、室町時代すでに流布し、さらに江戸時代から明治初期にかけて数多くの版本が刊行され、漢和字書の代名詞として用いられるほど盛行した。部首分類によって漢字の単字を掲出し、その右傍に字音、下に和訓を片仮名で記す。部首の立て方や配列、付された和訓の数などは諸本により大きく異なる。

諸本： 識語を持つものでは、1489 年本が最古。現存するものでは「延徳三年写本」（1491 年写本）が古く、「玉篇要略集」（1524 年写本）がこれに次ぐ。他に「篇目次第」（15 世紀ごろ写）、「夢梅本」（1605 年刊）、「慶長十五年本」（1610 年写本）などがある。

### 『運歩色葉集』

分類：イロハ分類

種類：国語辞書

成立：1548年

編者：未詳

内容：収録語彙数が約 17000 語と多いことが特徴。イロハ順に部が生まれ、その後は二字熟語、三字熟語、四字以上の熟語、単漢字といった順に配列されている。それぞれに用字法や語義説明が付されている<sup>8</sup>。

諸本：古写諸本としては、「元亀二年本」(1571)、「天正十五年本」(1587)、「天正十七年本」(1589)、「静嘉堂本」の四種が知られている。

### 『落葉集』

分類：「本篇」漢語をイロハ分類

「色葉字集」和語をイロハ分類し、さらに部首分類、意義分類

「小玉篇」部首を意義分類

種類：漢字字書

成立：1598年

編者：イエズス会の宣教師

内容：キリシタン版の一つ。音読み・訓読み・字形（部首）から漢字を検索できる。「本篇」「色葉字集」「小玉篇」の3篇からなり、構成は、「節用集」と「倭玉篇」を組み合わせたようなものとなっている。「本篇」は音読みから、漢字の字形と訓読みの検索を図る。「色葉字集」は訓読みから、漢字の字形と音読み、他の訓読みを求めることができる。「小玉篇」は漢字の形の面から、音読み・訓読みを検索できる。見出し語漢字については、楷書体をとらず、当時日常多く表記されている行書体を取り入れられている。

---

<sup>8</sup> 相澤（2005）は、『運歩色葉集』の音訓併記を大きな特徴として主張している。音訓併記とは、「見出し語の左右に字音と和訓が記載」（p.327）されていることを言う。そしてその音訓併記の表記形式が、「漢語の訓法の一つ」（p.334）である文選読みと「概ね一致する」（p.329）ことから、『運歩色葉集』の編纂目的を考察している。また、「元亀二年本」が、「識語を有するものの中で最も古いもの」（p.328）であることを指摘している。

## 5. 調査結果

古辞書における「シシ型」「イ型」の出現回数の調査結果をまとめると以下の通りである。  
 〈表4〉は、「シシ型」「イ型」の登場回数の合計を抜き出したものであり、全ての調査結果は巻末に掲載する。なお本調査は、各古辞書の影印における該当箇所を実際に確認し行っている。

〈表4〉各形容詞における「シシ型」「イ型」の登場回数

しし	い		
あさましし	1	あさましい	0
あしし	100	あしい	0
あたらしし	3	あたらしい	0
あやうしし	0	あやうしい	0
あやしし	0	あやしい	0
あわたたしし	1	あわたたしい	0
いしし	0	いしい	0
いそがしし	2	いそがしい	0
いたわしし	0	いたわしい	0
いつくしし	6	いつくしい	0
いとおしし	8	いとおしい	13
いとしし	1	いとしい	3
いとわしし	0	いとわしい	0
いぶかしし	0	いぶかしい	0
いまわしし	0	いまわしい	0
いみじし	2	いみじい	1
いやしし	11	いやしい	0
いらいらしし	2	いらいらしい	0
うつくしし	0	うつくしい	5
うやうやしし	0	うやうやしい	0
うるわしし	7	うるわしい	0
うれしし	1	うれしい	4
おかしし	3	おかしい	0
おこがましし	0	おこがましい	0
おしし	0	おしい	0
おそろしし	5	おそろしい	1
おなじし	2	おなじい	0
おびただしし	0	おびただしい	1
かうばしし	33	かうばしい	0
かしましし	1	かしましい	0
かなしし	0	かなしい	0
かまびすしし	0	かまびすしい	0
かろがろしし	0	かろがろしい	0
きびしし	6	きびしい	1
きぶしし	0	きぶしい	0
くちおしし	0	くちおしい	0
くるしし	0	くるしい	0
くわしし	20	くわしい	0
けしし	0	けしい	0
けわしし	6	けわしい	2
こちあしし	1	こちあしい	0
こざかしし	1	こざかしい	0
さかしし	8	さかしい	0
さがしし	4	さがしい	5
さびしし	2	さびしい	4
さみしし	0	さみしい	0
さわがしし	1	さわがしい	0
したしし	5	したしい	0
すさまじし	10	すさまじい	2
すずしし	12	すずしい	0
たくましし	2	たくましい	0
ただしし	27	ただしい	2
たのもしし	0	たのもしい	1
とぼしし	6	とぼしい	0
なだたしし	0	なだたしい	0
なつかしし	2	なつかしい	0
なましし	3	なましい	0
にぎわしし	0	にぎわしい	0
はげしし	2	はげしい	0
はずかしし	0	はずかしい	0
はなはだしし	0	はなはだしい	0
ひさしし	7	ひさしい	0
ひとしし	5	ひとしい	0
ほしし	1	ほしい	2
まさしし	2	まさしい	1
まだしし	0	まだしい	0
まどしし	4	まどしい	0
みぐるしし	2	みぐるしい	0
むつかしし	1	むつかしい	0
むつましし	1	むつましい	0
むなしし	2	むなしい	0
めざましし	0	めざましい	0
めずらしし	4	めずらしい	0
やかましし	0	やかましい	0
やさしし	9	やさしい	6
ゆかしし	1	ゆかしい	0
ゆゆしし	3	ゆゆしい	0
ようがましし	0	ようがましい	0
よろしし	2	よろしい	0
わびしし	0	わびしい	0

・「シシ型」は50種が確認された。形容詞ごとにみると、「シシ型」が顕著に現れていたのは「あしし」「かうばしし」「ただしし」であった。

・「イ型」は17種が確認された。形容詞ごとにみると、「イ型」が最も顕著に現れていたのは「いとをしい」であった。

・「シシ型」と「イ型」の両方が見られた形容詞は以下の14種であった。

「いとおしし／いとおしい」	「いとしし／いとしい」	「いみじし／いみじい」
「うれしし／うれしい」	「おそろしし／おそろしい」	「きびしし／きびしい」
「けはしし／けはしい」	「さがしし／さがしい」	「さびしし／さびしい」
「すさまじし／すさまじい」	「ただしし／ただしい」	「ほしし／ほしい」
「まさしし／まさしい」	「やさしし／やさしい」	

またこのうち、一つの諸本の中で「シシ型」と「イ型」の両方がみられたのは、『落葉集』の「いとしし／いとしい」のみであった<sup>9</sup>。もっとも「いとしし」が本篇に、「いとしい」が色葉字集に掲載されており、並列させているものと断言することはできない。

・古辞書ごとにみると、「シシ型」を最も多く掲載していたのは『落葉集』であった。次いで「元龜二年京大本運歩色葉集」、「文明本節用集」、「静嘉堂本運歩色葉集」の順に多く掲載されていた。また「イ型」の掲載は『節用集』に多くみられた。

## 6. 考察

調査より、「シシ型」「イ型」の出現回数が、各古辞書や各形容詞により大きく異なることが確認された。ここでは、論点を4つに絞り、それぞれについて考察する。

### 6.1 「シシ型」になりやすい形容詞

「シシ型」になる形容詞とならない形容詞の違いについて、先行研究で指摘されている特徴を確認しつつ、その他の観点からの考察を試みる。

---

<sup>9</sup> 「文明本節用集」の索引に「アシイ」が見られたが、影印を確認したところ「アシイコト」という記述であった。よって連体形としての記載と判断し、終止形の「イ型」としては数えない。

### 6.1.1 先行研究から

先行研究では、基本的な形容詞ほど「シシ型」になりやすいとされている。例えば鈴木（1963）は、形容詞の基本語彙的性格を確認するために、「源氏物語」「平家物語」「徒然草」「日仏辞書」の4種の資料に対象の形容詞自体が登場するかどうか調査を行なっている<sup>10</sup>。その結果、鈴木自身が「シシ型」を観測した形容詞57語のうち、35語が4種全てに登場し、いずれの資料にも見られなかったのはわずか3語のみだった。ここから鈴木は、「シク活用形容詞のうちでも基本的な、いわば共通語彙ともいべきものにシシ語尾形容詞が現われる」（p.56）と考察している。

本研究で行なった統計調査には、鈴木（1963）の調査では対象となっていなかった形容詞も含まれている。よって、今回の調査で対象となった80種のシク活用形容詞について、それぞれの性格が基本的であるか否かを確認するために、鈴木の調査を引き続いて行う。あくまでも鈴木の研究の延長として行うため、鈴木が使用していた「源氏物語」「平家物語」「徒然草」「日仏辞書」の4種の資料を利用する。次の〈表5〉は、その結果を示したものである。わかりやすくするために、本研究の統計調査で「シシ型」が観測された形容詞の欄を黄色で色付けし、また資料掲載数ごとに色を分けている。

〈表5〉4種の資料における、調査対象形容詞の掲載の有無

	シシ型の数	源氏物語	平家物語	徒然草	日仏辞書	資料掲載数
あし	100	○	○	○	○	4
かうばし	33	○	○	○	○	4
ただし	27	○	○	○	○	4
くわし	20	○	○	○	○	4
すずし	12	○	○	○	○	4
いやし	11	○	○	○	○	4
すさまじ	10	○	○	○	○	4
やさし	9	○	○	○	○	4
さかし	8	○	○	○	○	4
うるわし	7	○	○	○	○	4
ひさし	7	○	○	○	○	4
きびし	6	○	○	○	○	4
とぼし	6	○	○	○	○	4
おそろし	5	○	○	○	○	4

<sup>10</sup> 鈴木（1963）は、平安時代の代表として「源氏物語」を、鎌倉時代の代表として「平家物語」と「徒然草」を、その他として「日仏辞書」を選択している。なお「日仏辞書」は「日葡辞書」とほぼ同じ内容であり、一定の信頼に足るものと言える。

したし	5	○	○	○	○	4
ひとし	5	○	○	○	○	4
めずらし	4	○	○	○	○	4
おかし	3	○	○	○	○	4
ゆゆし	3	○	○	○	○	4
いそがし	2	○	○	○	○	4
いみじ	2	○	○	○	○	4
おなじ	2	○	○	○	○	4
さびし	2	○	○	○	○	4
なつかし	2	○	○	○	○	4
まさし	2	○	○	○	○	4
みぐるし	2	○	○	○	○	4
むなし	2	○	○	○	○	4
あさまし	1	○	○	○	○	4
あわたたし	1	○	○	○	○	4
うれし	1	○	○	○	○	4
さわがし	1	○	○	○	○	4
むつかし	1	○	○	○	○	4
むつまし	1	○	○	○	○	4
ゆかし	1	○	○	○	○	4
あやし	0	○	○	○	○	4
うつくし	0	○	○	○	○	4
おし	0	○	○	○	○	4
かなし	0	○	○	○	○	4
かろがろし	0	○	○	○	○	4
くちおし	0	○	○	○	○	4
くるし	0	○	○	○	○	4
けし	0	○	○	○	○	4
たのもし	0	○	○	○	○	4
はずかし	0	○	○	○	○	4
わびし	0	○	○	○	○	4
いとおし	8	○	○	×	○	3
いつくし	6	○	○	×	○	3
けわし	6	○	○	×	○	3
さがし	4	○	○	×	○	3

あたらし	3	○	○	×	○	3
はげし	2	○	○	×	○	3
よろし	2	○	×	○	○	3
あやうし	0	○	○	○	×	3
いたわし	0	○	○	×	○	3
いぶかし	0	○	×	○	○	3
かまびすし	0	×	○	×	○	3
はなはだし	0	×	○	○	○	3
めざまし	0	○	○	×	○	3
なまし	3	×	○	○	×	2
たくまし	2	×	○	×	○	2
こざかし	1	×	○	×	○	2
ほし	1	×	○	×	○	2
いし	0	×	○	×	○	2
いまわし	0	×	○	×	○	2
うやうやし	0	×	×	○	○	2
おこがまし	0	○	○	×	×	2
おびただし	0	×	○	×	○	2
まどし	4	×	×	○	×	1
いらいらし	2	×	×	×	○	1
かしまし	1	×	×	×	○	1
いとわし	0	○	×	×	×	1
なだたし	0	○	×	×	×	1
まだし	0	○	×	×	×	1
いとし	1	×	×	×	×	0
こちあし	1	×	×	×	×	0
きぶし	0	×	×	×	×	0
さみし	0	×	×	×	×	0
にぎわし	0	×	×	×	×	0
やかまし	0	×	×	×	×	0
ようがまし	0	×	×	×	×	0

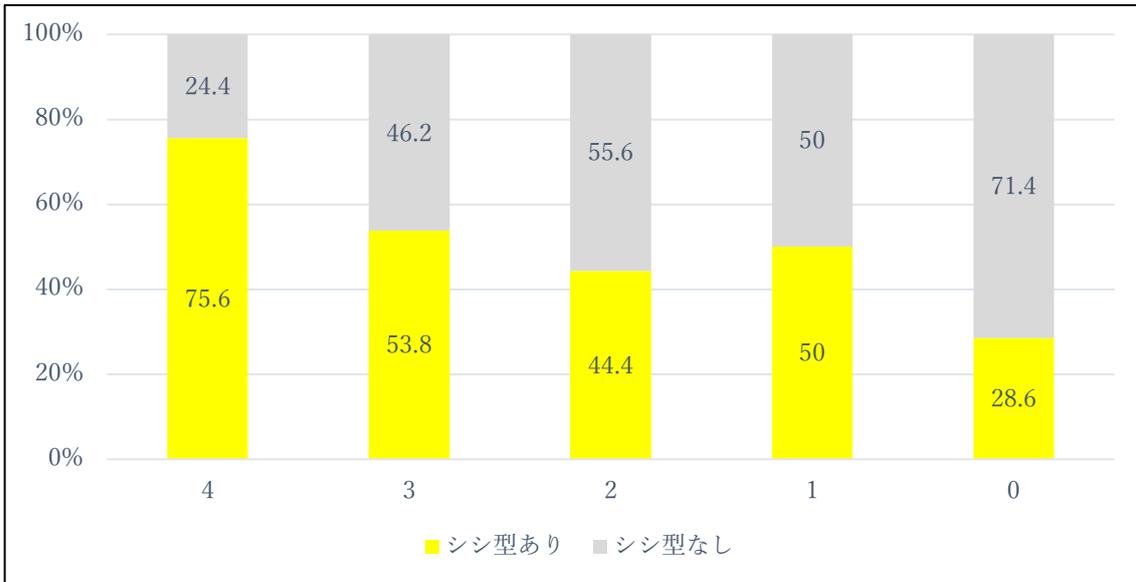
以下の〈表6〉は、〈表5〉の結果を数値としてまとめたものである。また〈図1〉は、「シシ型」が見られた形容詞と見られなかった形容詞それぞれにおける、資料掲載数の割合を示したグラフである。〈図2〉は、資料掲載数ごとに、「シシ型」の有無の割合を示したグラフである。なお割合は、小数第二位を四捨五入して示すものとする。

〈表6〉「シシ型」の有無および資料掲載数ごとにみる、形容詞の種類の数値

		資料掲載数					合計
		4	3	2	1	0	
シ シ 型	ある	34	7	4	3	2	50
	ない	11	6	5	3	5	30
	合計	45	13	9	6	7	80



〈図1〉資料掲載数の割合



〈図2〉「シシ型」の有無の割合

以上の表とグラフより、「シシ型」が観測された形容詞 50 種のうち、68%に当たる 34 種が 4 つの資料すべてに登場していることがわかる。また、いずれの資料にも見られないのはわずか 2 種のみであった。さらに〈図2〉のグラフから資料の掲載数ごとにみると、概ね、資料掲載数が大きいほど「シシ型」の占める割合が大きくなっている傾向が看取される。このことから、今回の調査においても、使用頻度の高い基本的な形容詞ほど「シシ型」になっている様子が確認できる。よって先行研究で指摘されている特徴は妥当だと考える。

ここで少し視点を変え、「シシ型」が確認されていないが 4 種の資料全てに掲載されている形容詞、および「シシ型」が確認されたにも関わらずどの資料にも見られなかった形容詞について検討する。前者は〈表5〉の「あやし」から「わびし」に該当する部分であり、11 例確認された。後者は「いとし」と「こちあし」の 2 例が確認された。

まず前者について考える。これらは、語彙の性格が基本的で、使用頻度が高いが、「シシ型」にはなりにくい形容詞であると言える。「シシ型」になりにくい理由として第一に考えられるのが、終止形としての使用が少ないという可能性である。この傾向が最も顕著だったのが「けし」である。「けし」はいずれの資料においても、「けしうはあらず」「けしからず」等の否定形で掲載されていた<sup>11</sup>。また、連体形などでの使用が多く、述語としての使用頻度

<sup>11</sup> 小学館『全文全訳古語辞典』における「異し」の意味と用例は次の通りである。

け・し 【怪し・異し】①普通と違っている。異常である。変だ。例「はろばろに思ほゆるかも然(しか)れどもけしき心を吾(あ)が思(も)はなくに」〈万葉・15・3588〉②変である。納得がいかない。例「けしう、『心置くべきことも覚(おぼ)えぬを、何によりてか、かからむ』と、いといたう泣きて」〈伊勢・21〉

また、「平安時代以降、打消しを伴い、「けしうはあらず」「けしからず」の形で用いることが多い」との注記が付されている。

が低い可能性も考えられる。この可能性について検討するためには、個々の形容詞がどのような活用形で用いられやすいのか、古辞書以外の文献にも広く当たって調査をする必要がある。本研究では残念ながらそこまでの調査は行えないが、もしこの可能性に一定の妥当性が見出されれば、基本的な形容詞ほど「シシ型」になりやすいという説はより強固なものとなるだろう。

第二に、意味の類似した他の形容詞に代替されてしまい、「シシ型」があまり浸透しなかった可能性が考えられる。例えば「うつくし」は「いつくし」と意味が似通っており、その使い分けがどの程度行われていたのかは定かではない。また「あやし」も「いやし」と類義語の関係にある。ここで「いつくし」と「いやし」を〈表5〉で確認すると、「いつくし」は「シシ型」6例、資料掲載数は3であり、「いやし」は「シシ型」11例、資料掲載数は4である。すなわちどちらの形容詞も使用頻度が高く、「シシ型」も多く観測されたということである。よって、「うつくし」や「あやし」は、他の形容詞の存在により、「シシ型」への変化がそれほど起こらなかったものと考えられる。

続いて後者の「いとし」「こちあし」について考える。これらは、基本的な語彙ではなく、使用頻度が高くないが、「シシ型」が見られた形容詞である。このうち「こちあし」は、「シシ型」になりやすい「あし」からの類推で「シシ型」が発生したものと言えるだろう。また二つの形容詞に共通する特徴として、観測された「シシ型」が1例のみであることが挙げられる。複数例確認されていたならともかく、わずか1例であることにどれほどの意義を見出すべきかが問題となる。合計で26もの諸本を調査した中で、1例しか観測されなかったという事実は、「シシ型」の浸透、定着を示唆するものとは言えないだろう。さらに言えば、この「シシ型」がいわば外れ値のような存在である可能性も考えられる。よって、現段階で「いとし」「こちあし」について論を展開することは、あまりにも推測としての側面が強く、また「シシ型」の特徴を考える上での重要性に乏しいと判断する。この考察を行うためには、「シシ型」の使用の実態を確定できるほどまでに、調査を拡大する必要があるだろう。

### 6.1.2 新たな観点から

続いて、先行研究では指摘されていない観点から、「シシ型」になりやすい形容詞の特徴を考える。以下に二つの仮説を検証する。

第一に、音韻面から、「-しし」の直前の母音が影響しているという説を考える。〈表7〉は、「し」の直前の母音ごとに個数を数えたものであり、割合は、それぞれの合計数における母音ごとの数を、小数第二位を四捨五入して示したものである。

〈表 7〉直前の母音ごとの個数

	a	i	u	e	o	合計
調査全体	50 (62.5%)	6 (7.5%)	9 (11.3%)	3 (3.8%)	12 (15%)	80
シシ型	33 (66%)	3 (6%)	4 (8%)	2 (4%)	8 (16%)	50
イ型	7 (41.2%)	3 (17.6%)	1 (5.9%)	1 (5.9%)	5 (29.4%)	17

ここから、「シシ型」では、直前の母音が「a」である場合が6割以上を占めていることがわかる。しかし、調査全体の個数を鑑みると、全体の数値と「シシ型」の数値が比例している様子が窺える。よって、直前の母音の特徴を、「シシ型」特有のものとして見ることは難しい。

第二に、形容詞の表す内容により、「シシ型」のなりやすさに違いが生じるという説について考える。「1.1 ク活用形容詞とシク活用形容詞の違いについて」でも述べた通り、形容詞には状態を示すものと情意的な内容を示すものの2種類があり、ク活用には前者が多く、シク活用には後者が多いとされている。今回調査したシク活用形容詞のうち、状態を示すものは61種、情意的な内容を示すものは19種であった。また「シシ型」はそれぞれ、40/61種(65.6%)、10/19種(52.6%)であった。ここから、情意的な形容詞よりも状態的な形容詞の方が「シシ型」になりやすいという傾向を見ることができる。もっとも、この傾向は明瞭なものとは言い難く、加えて、前提となる指示内容の完全な分類は困難である。そのため、状態的な内容を示す形容詞の方が「シシ型」になりやすいという説は、説得力に乏しいものと言わざるを得ない。そこでこの説について、もう少し検討を加える。

まず、「シシ型」において情意的なものが少ない理由について考察する。考えられる要因としては、詠嘆の終助詞を伴って利用される場面が多かった可能性が指摘できるだろう。詠嘆を表す終助詞は、名詞または連体形に接続する。心情を表す形容詞が詠嘆の終助詞に接続しやすいことは容易に想定できる。よって情意的な形容詞は、「惜しきことかな」といった具合に、連体形で使用されることが多かったのではないだろうか。それゆえに、文の終止で用いられることが少なくなり、「シシ型」になりにくかったと推察できる。

次に、表現内容と活用の関係、および「シシ型」の成立過程に着目して考察する。状態を表す形容詞がク活用に多いということを鑑みれば、上に述べた傾向を、ク活用的な要素を持つ形容詞の方が「シシ型」になりやすいという傾向と換言することが可能である。「3.3 「シシ型」の成立に関する考察」で言及した通り、「シシ型」はク活用における復元方法により生まれたものと考えられる。よって、ク活用的な要素を持つシク活用形容詞は、他のシク活用形容詞に比べ、より積極的に「シシ型」に結びついたものと推察できる。ゆえに、形容詞の指示内容というよりも、ク活用的な要素の存在が、「シシ型」のなりやすさに影響してい

たとえることも可能なのではないだろうか。ただ現時点において、ク活用的な要素として指摘できるのは、指示内容が状態的であるという点のみである。この考察の妥当性を向上させるためには、意味内容以外のク活用的な要素、すなわちク活用とシク活用で差異を見出せる要素を発見することが必要である。ク活用的な要素の特徴をより明確に抽出することが今後の課題である。

## 6.2 「あし」の特異性

今回の調査により、「あし(悪し)」には以下のような特異性があることが明らかとなった。

- ① 「あしし」の登場回数が他の「シシ型」に比べ圧倒的に多い
- ② 「あしし」が複数の諸本に登場している

上記について、「あしし」の登場回数の多さは、「あし」という単語そのものの記載回数の多さに起因していると考えられる。しかし、「シ型」である「あし」と比較しても、「あし 11 例／あしし 100 例」と、「あしし」の出現回数の方が圧倒的に多い。これは、同様に「シシ型」が多く確認された「かうばしし」や「ただしし」では見られない現象である<sup>12</sup>。よって、「あしし」の登場回数の多さは、形容詞そのものの登場回数ではなく、「あし」に特有の性質によるものと推察できる。ここから、「あし」が「シシ型」と結びつきやすい形容詞であり、また当時「あしし」が広く浸透していた可能性が考えられる。

では、「あし」と「シシ型」の結びつきやすさの要因はどこにあるのだろうか。ここでは二つの点に着目して考察する。

第一に、「あし」が基本的な形容詞であるという点である。「6.1 「シシ型」になりやすい形容詞」で述べたように、基本的で使用頻度の高い形容詞ほど「シシ型」になりやすい傾向にあると考えられる。「あし」は意味内容が広く、特に用いられやすい語であるため<sup>13</sup>、他の形容詞よりも「シシ型」との結びつきが強くなったのではないだろうか。

第二に、「あし」が二音節であるという点である。シク活用形容詞においては、「あし」のような一部の終止形にしか二音節は現れない。そのため、二音節であることに違和感や不安定さが生じ、「シシ型」への変化が起りやすくなったのではないだろうか<sup>14</sup>。今回、「あし」

<sup>12</sup> 「かうばしし」「ただしし」において同様に「シ型」と「シシ型」の数を比較すると、「かうばし 132 例／かうばしし 33 例」「ただし 139 例／ただしし 27 例」となる。

<sup>13</sup> 小学館『全文全訳古語辞典』の「悪し」の項目には、以下の六つの意味が掲載されている。**①** (道義的に、あるいは道理の上から) 悪い。**②** 具合が悪い。不都合である。まずい。**③** (技術などが) へたである。不適切だ。**④** (身分・身なりが) 卑しい。みすばらしい。**⑤** (天候・性格などが) 荒々しい。激しい。**⑥** (体調・気分などが) 具合が悪い。すぐれない。

<sup>14</sup> 鈴木(1963)は、「二音節語に多くシシ形が認められるのは二音節(例えば『あし・をし』)で終止することが不安定であるため、『あしし』『いしし』『ほしし』『をしし』のように三音節

以外の二音節のシク活用形容詞としては、「いし（美し）」「おし（惜し）」「けし（異し）」「ほし（欲し）」を調査した。それぞれの結果を〈表 8〉に示す。

〈表 8〉二音節のシク活用形容詞の調査結果

	あし	いし	おし	けし	ほし
ーし	11	－	10	－	0
ーしき	3	－	0	－	0
ーしく	0	－	0	－	0
ーしし	100	－	0	－	1
ーしい	1	－	0	－	2
資料掲載数	4	2	4	4	2

「いし」<sup>15</sup>「けし」においては形容詞自体の記載が確認できず、「おし」では従来の「シ型」だけが、「ほし」では「シシ型」と「イ型」がわずかに観測された。「いし」は使用頻度が高くなく、また「けし」は否定形での使用が主であるために、「シシ型」が現れなかったものと考えられる。さらに「ほし」は助動詞での代替が可能であるため、「あし」のような特徴的な結果には至らなかったものと考えられる。「おし」については、文の終止で使用が少なかった可能性が考えられる。具体的には、「6.1 「シシ型」になりやすい形容詞」で言及したように、詠嘆の終助詞を伴って連体形で使用されたり、「惜しく思ふ」というように連用形で使用されたりすることが多かったのではないかと推察される。

以上の調査をもって、二音節であれば「シシ型」になりやすいと言うことは困難である。よって、ここからは反対に、音節の多い語は「シシ型」になりにくいのかどうかについて考察する。以下の〈表 9〉は、今回調査を行った形容詞のうち、五音節である 10 種の結果を示したものである。

---

にしたものと思われる。シシ形をとらないものは語の性格によるものか、たまたま管見に入らないものか、考究する必要がある。」(p.56) と述べている。

<sup>15</sup> 小学館『全文全訳古語辞典』における「美し」の意味と用例は次の通りである。  
い・し 【美し】①よい。優れている。見事である。②感心である。殊勝である。例「いしう申させ給ふ田代殿かな」〈平家・9・三草合戦〉③うまい。おいしい。美味である。

〈表 9〉五音節のシク活用形容詞の調査結果

	あわたたし	いらいらし	うやうやし	おこがまし	おびただし	かまびすし	かろがろし	こちあし	はなはだし	ようがまし
ーし	3	1	7	4	19	84	0	0	13	ー
ーしき	0	1	0	0	1	1	0	0	4	ー
ーしく	3	0	2	0	9	1	6	0	0	ー
ーしし	1	2	0	0	0	0	0	1	0	ー
ーしい	0	0	0	0	1	0	0	0	0	ー
資料掲載数	4	1	2	2	2	3	4	0	3	0

この表より、「シシ型」が見られたのは「あわたたし」「いらいらし」「こちあし」の3種のみだったことがわかる。加えて、いずれも1例もしくは2例に留まっており、「シシ型」へのなりやすさは非常に低いものと推察される。しかし、「シシ型」の少なさと音節の多さが関連していると判断するのは早計である。残念ながら今回はこれ以上の調査は行えないため、「シシ型」と音節の関係については今後の課題としたい。

なお、「6.1 「シシ型」になりやすい形容詞」でも触れたように、「こちあし」は、「心地」と「悪し」の複合語である。「悪し」に「シシ型」が多いことを鑑みれば、「こちあしし」が現れたことは相応の結果であると言えるだろう。

以上より、「あし」において大量の「シシ型」が観測された理由として、その基本的な性格が影響していることは間違いないだろう。しかしそれ以外にも、「あし」に特有の要素が絡んでいる可能性は十分に考えられる。今回は音節面に着目して考察を試みたが、さらに別の観点からも検討する価値があると考えられる。

### 6.3 「シシ型」と「イ型」の同時掲載の忌避

今回の調査の結果、「シシ型」と「イ型」両方が観測された形容詞は14種であり、なおかつ一つの諸本の中で同時に見られたものは1種のみだった。この結果に着目すれば、「シシ型」と「イ型」の同一諸本内での同時掲載が避けられていた可能性が考えられるだろう。では、同時掲載が忌避されていた場合、そのような動きが取られた理由はどこにあるのだろうか。ここで、辞書（字書）としての統一性を図る目的のために同時掲載が避けられていたという仮説を立てる。一つの諸本に複数の終止形が同時に記載されることは、辞書（字書）の統一性を失わせ、読者の混乱を招くことに繋がると言える。そのため、形を統一させる動きがあったとしても不思議ではない。よってここでは、この仮説を検証する。

次の〈表 10〉は、それぞれの古辞書に掲載されている調査対象形容詞の個数を、掲載さ

れている活用形ごとに示したものである。

〈表 10〉 各古辞書における活用形の登場回数

		－し	－しき	－しく	－しし	－しい
字鏡集	寛元本	133	0	3	0	2
下学集	東教大	5	1	1	0	0
	春林本	6	0	2	0	0
	文明十七年本	4	0	0	0	0
	前田家	11	0	1	2	0
	文明十一年本	4	0	2	0	0
	榊原本	4	2	4	0	0
	亀田本	6	1	4	0	0
節用集	伊京集	28	1	4	0	0
	明応五年本	24	1	3	0	1
	饅頭屋本	33	0	5	0	4
	黒本本	51	2	13	1	2
	易林本	82	1	8	5	0
	文明本	449	50	69	53	3
	弘治二年本	71	2	26	2	11
	永禄二年本	80	4	16	0	10
	堯空本	57	3	15	3	7
	両足院本	33	3	17	0	4
倭玉篇	夢梅本	324	1	0	16	0
	篇目次第	513	3	0	2	0
	慶長十五年本	506	0	9	30	4
運歩	静嘉堂本	32	2	10	37	2
色葉集	元亀二年本	31	7	5	54	0
落葉集	本篇	106	0	0	115	0
	色葉字集	92	0	6	19	3
	小玉篇	97	0	0	12	0
合計		2782	84	223	351	53

この表から、「シシ型」と「イ型」の両方を広く載せている辞書（字書）はないことが見て取れる。例えば「文明本節用集」や『運歩色葉集』、『落葉集』では非常に多くの「シシ型」が掲載されているが、一方の「イ型」は数例、もしくは0例に留まっている。しかし、結果を詳細に見ると、次のような例が発見される。

例1「文明本節用集」

くわし	7
くわしき	2
くわしく	3
くわしし	4
くわしい	0

例2「慶長十五年本倭玉篇」

ただし	24
ただしき	0
ただしく	0
ただしし	5
ただしい	0

例3「弘治二年本節用集」

やさし	1
やさしき	0
やさしく	0
やさしし	0
やさしい	1

これらは、「シシ型」「イ型」と同時に、従来の「シ型」も掲載されているものである。例3のような、「イ型」と「シ型」が同時掲載されているケースは稀だが、例1、例2のように「シシ型」と「シ型」が同時掲載されているケースは多く確認できる。このことから、終止形を統一して表記するという意識が高かったと考えることには疑問が残る。この疑問を解決するために、ここで、語幹と「シ型」の関係に注目する。〈表2〉で示した通り、シク活用形容詞の終止形は「-φ」となる。すなわち、シク活用形容詞において、語幹と「シ型」は全く同じ形をしているのである。ここから、「シ型」がシク活用形容詞の基準の形として認識されていたと考えることが可能ではないだろうか。そして、一方の「シシ型」および「イ型」は、新たに誕生した応用的な形であると言える。以上のように考えれば、「シ型」と「シシ型」「イ型」の同時掲載への抵抗感は少なかったものと推測することができるだろう。

まとめると、「シシ型」と「イ型」の両方を広く載せている諸本はなく、また「シ型」との同時掲載は、終止形に対する認識の差によるものと説明できる。よって前述した、辞書としての統一性を図るために同時掲載が忌避されていたという仮説は、妥当性のあるものと言えるのではないだろうか。

また、統一性を保つために「シシ型」「イ型」のいずれかを選択する状況が存在していた場合、両者から自由に選択できるほど、それぞれの形が定着していたと推察できる。つまり、「シシ型」も「イ型」も文法的に許容された使用法として用いられていたのではないだろうか。ここから、「シシ型」が当時広く定着していた様子が窺える。では、各古辞書は、どのような理由に基づき「シシ型」あるいは「イ型」を選択していたのだろうか。これに関しては次の「6.4 各古辞書における「シシ型」と「イ型」」で詳述する。

#### 6.4 各古辞書における「シシ型」と「イ型」

今回の調査では、それぞれの古辞書において、「シシ型」もしくは「イ型」を偏って掲載している様子を見ることができた。では、どのような理由で、「シシ型」あるいは「イ型」の選択が行われていたのだろうか。

先行研究より、「シシ型」は口頭語における文語的表現として使用されたことに起源を持ち、その後、実際には誤った形ではあるものの、文語として流通していたと考えられている。「3.2 中世における口語と文語」で推察したように、中世の人々は、「シシ型」を文語、「イ型」を口語とする規範意識を持っていたものと考えられる。このことを踏まえると、古辞書においても、文語を載せようという意識が働けば「シシ型」を、口語を載せようという意識が働けば「イ型」を選択するようになっていたと考えることが可能である。また今回の調査を行っていた際、漢和辞書（漢字字書）には異体字の掲載が多く、日常的な使用には適していないような印象を受けた。ここから、漢和辞書（漢字字書）には伝統的な表現や文語が反映されており、一方で国語辞書<sup>16</sup>には当時の日常的な用法や口語が反映されている可能性を指摘できる。よって、漢和辞書（漢字字書）であれば「シシ型」が、国語辞書であれば「イ型」が選択されているという仮説を立て、以下に検証する。

次の〈表 11〉は、古辞書ごとの調査結果を、漢和辞書（漢字字書）と国語辞書に分類して示したものである。なお「文明本節用集」は漢和辞書（漢字字書）的な掲載方法を持つため、ここでは漢和辞書（漢字字書）として分類する。

〈表 11〉 辞書の分類ごとにみる「シシ型」と「イ型」の個数

分類	古辞書	シシ型	イ型
漢和辞書	字鏡集	0	2
	文明本節用集	53	3
	倭玉篇	48	4
	落葉集	146	3
国語辞典	下学集	2	0
	節用集（文明本を除く）	11	39
	運歩色葉集	91	2

もし仮説が正しければ、〈表 11〉の色付けした部分の数値が大きくなるはずである。「文明本節用集」、『倭玉篇』、『落葉集』、『節用集』（「文明本」を除く）の4項目ではこの傾向を確認することができる。しかし、『字鏡集』、『下学集』、『運歩色葉集』の3項目ではそのような傾向は見られない。特に『運歩色葉集』の結果は、予想を大きく外れるものである。

<sup>16</sup> 古辞書における国語辞書は、現代のそれとは性質が異なっている。本稿では、語彙集のような体裁を取るものを指す。

よってここからは、仮説からは説明できない『字鏡集』、『下学集』、『運歩色葉集』について、それぞれに考察を行う。また、『運歩色葉集』と同様に「シシ型」が多く見られた『落葉集』についても検討する。

#### 6.4.1 『字鏡集』および『下学集』について

まず『字鏡集』では、「シシ型」は確認されず、「イ型」は2例見られた。このような結果になった理由として、『字鏡集』がかなり古い辞書であることが関係していると考えられる。今回の調査に使用した「寛元本」が書写された年代は不明だが、『字鏡集』そのものの成立年は1245年以前と推定されている。これは調査対象としている他の古辞書と比べて非常に早いものであり、故に「シシ型」「イ型」両方の掲載が少ないものと考えられる。

続いて『下学集』では、「シシ型」が2例観測され、「イ型」は確認できなかった。このような結果になった理由として、『下学集』が教科書的な存在であり、長年に渡って諸本が作成され続けたことがあるのではないかと考える。要するに、元の形を保持しようとする動きがあったのではないだろうか。通俗的とはいえ、掲載されている語がすべて通俗的というわけではなく、口語を掲載させようとする意識はあまり働かなかったものと推察する。

ここで、『字鏡集』および『下学集』における「シシ型」「イ型」の個数を思索することの意義について検討する。両辞書で確認された「シシ型」と「イ型」は、いずれも0例か2例であった。「6.1 「シシ型」になりやすい形容詞」でも言及したように、数値があまりにも小さい事象を取り上げて研究対象とすることの意義については、慎重に考えなければならぬと言える。よって、『字鏡集』と『下学集』においても、0例か2例かの相違に明確な要因を求めることは難しいと考える。ここでは両辞書の特徴を踏まえた上で考察を行ったが、いずれも推測の域を出ないものである。

#### 6.4.2 『運歩色葉集』および『落葉集』について

今回の調査の結果、『運歩色葉集』と『落葉集』に「シシ型」が多く掲載されている傾向が発見された<sup>17</sup>。古辞書に「シシ型」が多く収録される要因として、活用形を広く扱っているために、結果として多く掲載された可能性が考えられる。しかし、これらの辞書において「シ型」および「シシ型」以外の活用形の掲載数は比較的少なく、この可能性は低いと考えられる。よってここでは、文語表現を掲載しようとした結果、口頭語の文語的表現として流通していた「シシ型」が掲載された可能性を考える。

まず『運歩色葉集』について、相澤（2005）は、『仮名文字遣』を典拠とする語が圧倒的に多いことや、文選読みを意識した音訓併記がなされていることに着目し、「漢詩や聯句連

---

<sup>17</sup> 鈴木（1963）は、「『運歩色葉集』、『落葉集』などの辞書に頻出しているのは辞書のもつ規範性の反映ではないかと思われる」（p.57）と述べている。

歌の製作に資することを主要な編纂目的にしている」(p.335)と主張している。もし相澤が述べているように、『運歩色葉集』が詩文の作成を主な目的として編纂されたものならば、文語を掲載しようという意識が働いていたとしても不思議ではない。熟語の配列方法などから見ても、『運歩色葉集』は形式的な特徴を持つ辞書であると言える。分類上は国語辞書ではあるものの、語の意義よりも漢字の読み方などを示すことに重点を置いた辞書であると考えられるだろう。また杉本(2021)は、「易林本節用集」との比較を通して『運歩色葉集』を研究している。その中で、正確でない漢字の略体がみえることや、都の新しい言葉が掲載されていないことに注目し、「〈運〉の用字は、〈易〉より一段低い階層社会の人びとの言語生活の反映を推測させよう」(p.7)と述べている。「3.3 「シシ型」の成立に関する考察」で述べた通り、「シシ型」は、文語的表現として誤って広まったものと推察される。『運歩色葉集』が低い階層社会を反映させた、俗語的な辞書であるならば、「シシ型」が多く掲載されていることの説明はつくだろう。よって『運歩色葉集』においては、文語表現を載せようとした際に、庶民が使用していた文語的表現である「シシ型」が掲載されたものと推測できる。

一方『落葉集』は、宣教師たちが作成した字書である。白井(2017)はその編纂目的について、「刊行時期からして、宗教書のローマ字本や羅葡日辞書(1595刊)のローマ字表記など、落葉集以前に刊行された文献のローマ字表記に対応する漢字表記を示すという目的はあったと思われる」(p.102)と述べている。また、難解な語彙の掲載が少ないことを指摘している。さらに千葉(2020)は、漢字が部首ではなく「かたち」で引けるようになっている点に着目し、日本語学習者の実用のために配慮されていることを指摘している。これらの研究から、『落葉集』は宣教師たちのための実用性を第一に考えて作られたものであるといえる。宗教書の翻訳のために字書を作成していたのならば、宣教師たちが文語表現の掲載を意図していた可能性は十分に考えられる。

ではなぜ、誤った形である「シシ型」が数多く掲載されているのか。考えられる可能性として、宣教師たちに、日本語の活用に対する正確な知識が不足していることが挙げられるだろう。『落葉集』に関する先行研究は、宣教師たちの日本語に対する理解力の高さや、独自かつ優れた編纂能力に着目したものが主流である。しかし今回の調査を踏まえると、シク活用形容詞の活用語尾をどこまで正確に理解していたのか、疑念を感じざるを得ない。よって、日本語の活用面における知識不足のために、文語的表現である「シシ型」が多く収録されたものと考えられる。

## 7. おわりに

本研究では、「シシ型」について新たな発見をすることを目的に、古辞書を対象とした調査および考察を行った。その結果、辞書という高い規範性が求められる書物において50種もの「シシ型」を観測することができた。これは、「シシ型」の定着の様子を示すものであると言え、調査は有意義なものだったと評価できるだろう。また、調査から得られた結果をもとに、先行研究で言及されていない点を中心に仮説を立てて検証した。それらについて以下に整理する。

### ① 「シシ型」になりやすい形容詞

先行研究に引き続いて調査を行い、基本的な形容詞ほど「シシ型」になりやすいという傾向を改めて確認することができた。また形容詞の指示内容が「シシ型」へのなりやすさに影響を与えている可能性について考察を行った。その結果、詠嘆の終助詞の存在や、ク活用形容詞的な要素が関連している可能性を指摘することができた。特にク活用的な要素については、今後、指示内容以外の観点からも考えることが必要だろうと考える。

### ② 「あし」の特異性

調査において、「あし」の「シシ型」が突出して多く観測された。これは「あし」の基本的な語彙性格により、「シシ型」との結びつきやすさが高められたためと考えられる。また、「あし」が二音節であることも、その要因として推察される。そこで、二音節および五音節の形容詞を取り上げ、「シシ型」と音節数の関係について考察を試みた。しかし十分な検討を行うことができず、結論を出すまでに至らなかった。

### ③ 「シシ型」と「イ型」の同時掲載の忌避

調査の結果、「シシ型」と「イ型」の掲載が各古辞書により偏っている様子が発見された。ここから、辞書の統一性を図ることを目的とし、どちらか一方を選択する動きがあったという説を主張することができた。さらに、「シシ型」と「イ型」が当時同時に存在し、そのどちらかを自由に選択できる程度には「シシ型」が定着していた可能性も指摘することができた。

### ④ 各古辞書における「シシ型」と「イ型」

「シシ型」と「イ型」の掲載は、文語と口語の規範意識に基づいて選択されていたと考えられる。ここから、漢和辞書（漢字字書）では「シシ型」が、国語辞書では「イ型」が選択されるという仮説を立て、検証を試みた。基本的には仮説通りの傾向を確認することができたが、例外も見られた。

また、『運歩色葉集』と『落葉集』で非常に多くの「シシ型」が観測された。『運歩色葉集』においては詩文作成という編纂目的およびその俗語的な性格が、『落葉集』においては宣教師たちの手により作成されたことが、この傾向の背景にあると考える。

本研究では、古辞書を対象に調査を行ったことで、各古辞書の特性や方針を確認することができた。またそこから、古辞書とシク活用形容詞の関係について、多角的な視点に立ってその可能性を探求し、合理的に調査、検討を行うことができた。日本語に対する当時の人々の意識や、「シシ型」の使用実態を看取できたことは、本研究の大きな意義であり成果であると考えられる。しかし十分な検討に至らなかった部分もあり、これは今後の課題である。調査対象を拡大してより詳細なデータを集めるとともに、慎重に比較、検討をする必要があるだろう。

また、各古辞書の特性や、古辞書同士の関連性についても探ることができた。しかし依然として不明な点が多く、今後の古辞書研究の発展に期待、注目したい。

#### 【参考文献、リンク】

- ・相澤貴之『『運歩色葉集』と『仮名文字遣』』『別冊論輯』2003年、駒澤大学大学院国文学会
- ・相澤貴之『『運歩色葉集』における音訓併記の性質—辞書編纂の立場から—』『駒澤国文』42号、2005年
- ・池田龜鑑編『源氏物語大成 卷四 索引篇』1953年、中央公論社
- ・沖森卓也編『日本語史』1989年、桜楓社
- ・沖森卓也編『図説 日本の辞書』2008年、おうふう
- ・沖森卓也編『図説 日本の辞書 100冊』2023年、武蔵野書院
- ・小田勝『実例詳解古典文法総覧』2015年、和泉書院 電子ブック（最終閲覧日 2024年1月20日）<https://elib.maruzen.co.jp/elib/html/BookDetail/Id/3000047833?2>
- ・檀之本北元「古學截斷字論」天保五年板『日本俳書大系 14 近世俳話句集』1927年
- ・亀井孝、大藤時彦、山田俊雄編『日本語の歴史 4 移りゆく古代語』1976年 a、平凡社
- ・亀井孝、大藤時彦、山田俊雄編『日本語の歴史 5 近代語の流れ』1976年 b、平凡社
- ・辛島美絵『仮名文書の国語学的研究』2003年、清文堂
- ・北原保雄「形容詞の語音構造」『中田祝夫博士功績記念 国語学論集』1979年、勉誠社
- ・北原保雄、小川栄一編『延慶本 平家物語 索引編 上・下』1996年、勉誠社
- ・北原保雄『日本語の形容詞』2010年、大修館書店
- ・京都大学文学部国語学国文学研究室編『元龜二年京大本運歩色葉集』1969年、臨川書店
- ・小島幸枝編『耶蘇会板 落葉集総索引』1978年、笠間書院
- ・小林好日「日本文法史」『国語科学講座 第六卷 国語法』1933年、明治書院
- ・白井純「落葉集本篇の掲載語彙について—古本節用集との比較をとおして—」『訓点語と訓点資料』139号、2017年

- ・杉本つとむ『『運歩色葉集』批判—『易林本節用集』と関連して』『早稲田日本語研究』30巻、2021年
- ・鈴木丹士郎「形容詞『ーシシ』について」『国語学研究』三 1963年
- ・鈴木丹士郎『近世文語の研究』2003年、東京堂出版
- ・千葉軒士「イエズス会宣教師の作成した漢字字書『落葉集』について」『アリーナ』23号、2020年
- ・東京学芸大学古辞書研究会、高橋久子編『東アジア語彙研究資料3 運歩色葉集単語索引』2009年、東京学芸大学古辞書研究会
- ・時枝誠記『改訂版 徒然草総索引』1967年、至文堂
- ・中田祝夫『文明本節用集研究並びに索引 影印篇・索引篇』1970年、風間書房
- ・中田祝夫、根上剛士『中世古辞書四種研究並びに総合索引 影印篇・索引篇』1971年、風間書房
- ・中田祝夫、林義雄『古本下学集七種研究並びに総合索引』1971年、風間書房
- ・中田祝夫『印度本節用集古本四種研究並びに総合索引 影印篇・索引篇』1974年、勉誠社
- ・中田祝夫、北恭昭『倭玉篇夢梅本篇目次第研究並びに総合索引 影印篇・索引篇』1976年、勉誠社
- ・中田祝夫、林義雄『字鏡集寛元本 影印篇』1978年、勉誠社
- ・中田祝夫『改訂新版 古本節用集六種研究並びに総合索引 影印篇・索引篇』2009年、勉誠出版
- ・西崎亨編『日本古辞書を学ぶ人のために』1995年、世界思想社
- ・根来司『中世文語の研究』1976年、笠間書院
- ・村田菜穂子『形容詞・形容動詞の語彙論的研究』2005年、和泉書院
- ・森田武「落葉集本篇の組織について」『國語學』13号、1953年
- ・柳田征司『室町時代の国語（国語学叢書5）』1985年、東京堂出版
- ・山内洋一郎『中世語論考』1989年、清文堂
- ・山田巖「古代語から近代語へ」岩淵悦太郎編『現代国語学Ⅲ ことばの変化』1958年、筑摩書房
- ・山本佐和子『抄物の言語と資料—中世室町期の形容詞派生と文法変化—』2023年、くろしお出版
- ・山本俊英「形容詞ク活用・シク活用の意味上の相違について」『國語學』23号、1955年、國語學會編
- ・慶長15年版『倭玉篇』データベース（最終閲覧日2024年1月20日）  
<https://home.hiroshima-u.ac.jp/jshira/kojisyo.html>
- ・ジャパンナレッジ（最終閲覧日2024年1月20日）  
<https://japanknowledge.com/lib/search/advanced/>